

光悦の芸術と消息

——岡村家コレクションの一史料によせて——

一

本阿弥光悦の生涯は、『本阿弥行状記』『にぎはひ草』などの史料を通じて、かなり明確なものになってきた。とくに昭和三十九年第一法規より公刊された共同研究『光悦』によって作品の新資料や自筆消息が現在可能なかぎり多数収集されたので、それによっていっそうその跡付けが可能になってきたのである。^{註1}しかしその後二十年、それらの消息もお系統的に芸術活動との照合が行われていないので、最近新発見の消息を紹介する機会に、若干その端緒をつけておきたいと思う。ここでは光悦自身の伝記はいちおう既に公表したものにゆずり、主題に限って列挙的に述べてみる。

さて光悦の芸術活動といっても、彼の芸術とは何であったのか、というところから説かれねばならないが、消息を通じてみるかぎり家職であった刀剣のとき・ぬぐい・めききの本阿弥家の三業については、きわめて言及するところが少ない。父光二の存生中は父の代理としての加賀往復があり、またその間にはじまった前田家老臣との交渉は晩年までつづいたが、光二が光心の婿養子であって光心に実子光利が誕生して以後は、家職を光利の子光徳に譲ったことがその理由として考えられる。それでも消息39では、今枝内記宛に「又

かたなの事、二郎三郎かたにてもすむ儀候」と云い切っており、刀剣に関する依頼が絶えなかったようである。

消息についてみるかぎり、光悦の最大関心は数寄すなわち茶事であった。光悦は自他茶会への招待とそれに伴う相客などに多くの配慮をしていた。消息17によると一昼夜四ヶ度に及ぶことさえあった。消息総数百四十五通の内、茶事に関するものは計二十二通に及んでいる。それについては謡であって計五通である。そのほか太鼓、笛、鼓筒に関して各一通があるが、これらは芸能としてか、蒔絵の製作に関してかはつきりしない。

一一

さてこうしたなかから芸術活動としてうかがわせるものは、まず光悦が慶長九年（一六〇四）より慶長年間に積極的に取組んだ嵯峨本の制作がある。これについては、消息42に今枝内記宛で「サカノ本之事モ意得申候」の句が見える。消息中には嵯峨の往来についてふれるものはあるが、嵯峨本に明確に言及したものはこの一通で、そのほか消息5に装幀用の雲母にふれて「今朝はきら給候、唯今令一覽候、驚目候」などがある。

つぎに光悦の鷹ヶ峰に移った元和以後の主な芸術活動が、作陶であって消息のなかの資料も多い。これについては共同研究『光悦』のなかで、前段の事情を照合し尽されているが、約十通に及んでいる。消息28は「焼物方」といった陶法の書物の返進を伝えたもので、最も早く慶長年間と推定され、いわば修業をはじめたころの消息と見られ、そのあとにこの時期の習作とみられる焼物を贈った消息が、

消息43・28・53とつづく。

元和中ごろになつての消息81は、加藤左馬介嘉明の注文した茶碗の出来と江戸への進上を、子息の式部少輔明成に伝えたもので、この時期から作陶も本格的となつたと見られる。消息118のたゑもんと宛の一通は、光悦の下職の釉がけと焼成を担当した職人との交渉であり、そのあとに楽吉左衛門宛の消息121・101・146の三通がつづく。ここでも「ちやわん四分ほど白土赤土御持候而、いそぎ御出可_レ有候」といい、「此ちやわんのくすりをあわせ可_レ給候」といった依頼がある。これは楽吉左衛門が代作したというのではなく、老後うごきが不如意になつてから、作陶の下職を手伝つたものとみておきたい。作陶に関して光悦は自信をもち、『行状記』にも「陶器を作る事は余は惺々翁にまされり、然れども家業体にするにはあらず、只鷹峰のよき土を見立て折々拵へ侍る計りにて、強て名を陶器にてあぐる心露いささかなし」と語っている。

今度、岐阜県国府町の岡村守彦氏より、京都国立博物館が受贈した多数の文化財のなかから見出された左の光悦消息は、この間において考えると興味が深い。

茶碗、乍貳出来、

令_レ満足_二候、尚以_レ面

可_レ申候、頓首

七 三日 光悦（花押）

謹上吉左衛門尉殿 光悦

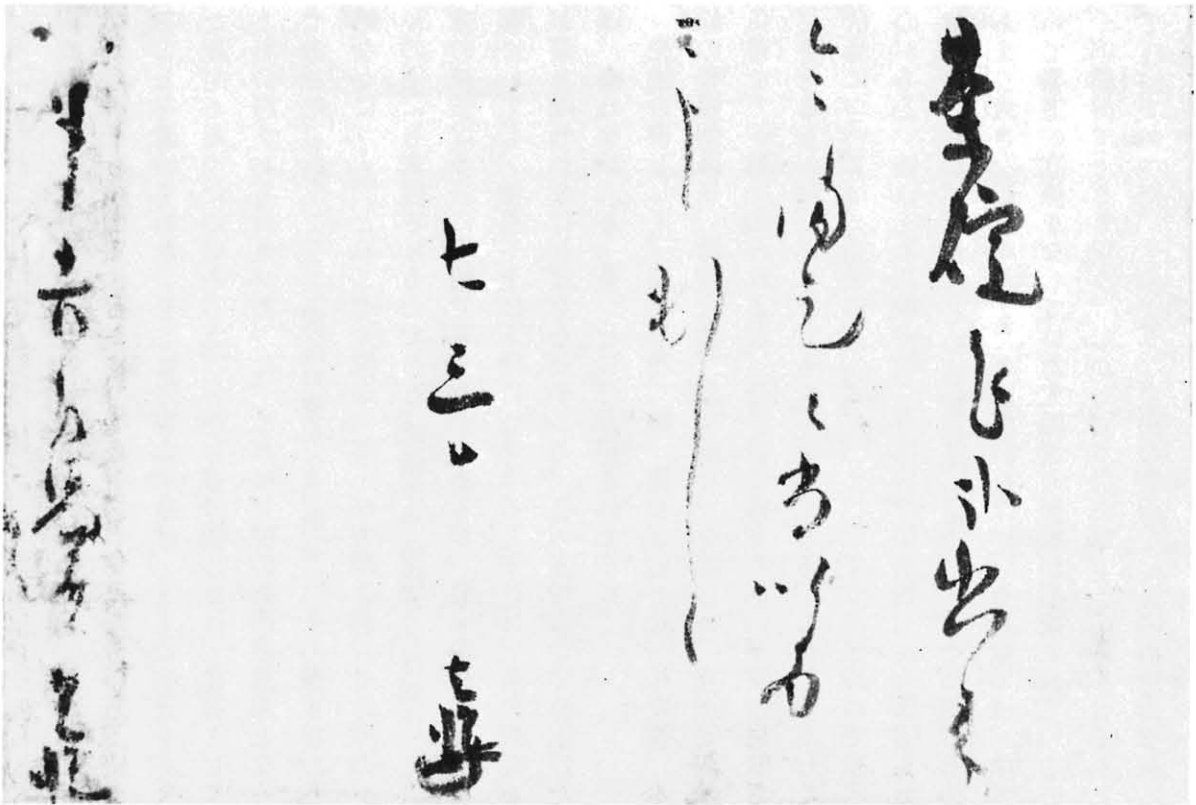
参

この宛名は吉左衛門尉とあつて、吉は苗字とみられるから吉田（角倉）一族かと推測される。その自作を二つまでも贈るにはふさわしい宛名と云えるであろう。しかしそれに該当する人物が確認できないので、今は不詳とするほかはない。

三二

さらに光悦の芸術活動として注目されるのは、蒔絵である。これまで光悦の蒔絵に関する資料としては、『本阿弥行状記附録』に「今世に光悦楓と唱え候は、祖父（光悦）貴船へ参詣の節、奥院の所に有之候きぶね紅葉とり帰、絵にも認、蒔絵にも被_レ成候と、かく何事にも自然と風流の生質なり」という一節であつた。しかし消息と對比すると、光悦が寿命院（前田利常生母）に宛てた消息2に、「関白様御硯出来申候間、持進入候」という句があり、なお「宿願かけいたし候ゆへに（中略）返々御うちに入候者、参可_レ得_二御意_一候」とまでべているものがあつて、光悦が前田家の扶持をうけた早い時期に、硯箱の用命にも応じていたことを物語ってくれる。そのころにはさきにもふれたように楽器なども用命をうけ、また本法寺のためには消息22に「道風之法華経一部十巻并箱机青貝令_二寄進_一候」とあつて、青貝の箱机を製作して寄進したと考えられる。なお、楽器の小鼓の筒に関しては、今枝内記宛の消息43に「又小鼓の筒の金貝之事、其方成かね可_レ申候、談合此方ニテ可_レ仕候」とあつて、金沢では調製できないことを察して、自分においてしようとして述べている。

この蒔絵にちりばめる金貝については、新兵衛尉宛で消息119で、「金貝大方出来候間、懸_二御目_一候」といつてミトリ（縁）の部分葉



光悦消息 (吉左衛門尉宛)

の少ないことについて指示を求め、さらに「此金貝ノ出来候分、葉ナガク候而見にくき所をハ、墨ヲ付而可給候、切不可申候、我等も弥四二居申候、早々待申候」と書き送っている。光悦が注文者の新兵衛尉と談合しつつ、おそらくその下職を担当した弥四とともに返事を待機していたものと考えられるのである。

このような光悦の蒔絵には、さながら茶碗における楽吉左衛門と対比される形で、京都の五十嵐太郎兵衛・孫兵衛兄弟の存在が推定されるのである。五十嵐家は、そのさきは東山殿義政に幸阿弥道長と並んで蒔絵をもって仕えた五十嵐信斎にはじまり、秀吉の時には宗清或はその養子甫斎が出仕していた。幸阿弥家になう高台寺蒔絵の構築的な意匠とは対比的な平面的で絵面的な意匠として、しかも技法の精妙な点が評価されているのである。光悦の蒔絵はその点、五十嵐家風であると云わねばならないが、さらにそれよりも荘飾的な点に特徴がある。この五十嵐家との関係が、消息102・103・127の三通によって文献的な徴証が得られるのである。消息の内容は御茶の招待、重箱の謝礼の程度で、直接の職業的関係にはふれていないが、これに関する考証によって五十嵐甫斎が本阿弥祝以の子として入婿したこと、甫斎の子道甫が加賀と関係をもち、二代道甫は金沢にて没していることが知られている。いわゆる加賀蒔絵の源流であるが、京蒔絵の伝波もおそらく光悦との関係によって実現したのではなからうか。

四

最後に、光悦の芸術といえは誰しも第一に挙げるのが、書である。

絵もよくしたことは、『本阿弥行状記』に「余も絵は少しはかく事を得たりといへども、中々其妙に至らざれば」と言っているように、なお自信をもつまでに至らず、松花堂惺々翁(昭乗)の方が優れていることを認めていた。そこに光悦の場合は、とくに宗達を必要とした理由もあつたのであろう。しかし書に関しては、能書として自他ともに許すおもむきがあつた。それは光悦の芸術の基本となるものであつた。光悦のように個性の豊かな芸術家は、その書すなわち「手」のなかに、人間としての光悦の「型」が表現され、その他のジャンルの上にも表現されるのである。^{注2}嵯峨本や蒔絵などは制作のなかに、書の技法は多分に応用できるものであるが、最もかけへだたつた作陶にしても、釉薬や土は下職に任せうるとすれば、その形姿と作風が最も問われなければならなかつた。その光悦のつくり上げた「型」は、書のなかに「手」として表明されてくる。

光悦の書として、四季草花、鶴、鹿などの下絵、和歌巻、木版下絵の和漢朗詠集、詠歌大概、漁父辞などをはじめ、立正安国論等の仏書などが数々知られるが、その点で最も光悦の平常の息吹きを感じさせるものは、いうまでもなく消息である。しかしそうした書の伝流については、光悦自身「私流」というようにきわめて独自のものがある。彼は三十八歳の時、青蓮院尊朝法親王より筆道を伝授されたというが、それはその公家趣味の現れとはみられるものの、あまり大きな影響を与えたとは思われない。その点では、中世において書道の底流をなしていた大師流の影響が指摘されているのは、一応納得できると思う。しかしいうならば、その枠をはるかにこえて自由であつた。そのような自由な芸術としての消息のなかに、彼自身の異なつた芸域の消息をもらしていることも亦、大いに興味ふ

かいたところであろう。

(林屋辰三郎)

〈注〉

- 1 林屋辰三郎(代表)・林屋晴三・岡田譲・山根有三・小松茂美・赤井達郎による共同研究図録『光悦』は、本稿の執筆に当つても参照するところが多かつた。とくに消息番号はすべて右図録の番号である。
- 2 小稿「文化における「型」の形成」『文学』一九八三年十一月、参照